

永井荷風作品の研究
——同時代との関わりを中心に——

浅井航洋

要約

本論文は永井荷風の小説作品について、同時代言説や先行する文学作品、モデルなどの観点から検討を加えたものである。

永井荷風は強いイメージを持った作家である。たとえば好色で世をすねた老人のイメージは現代でも流通し続けている。これは明治・大正・昭和にわたって活動した息の長い作家であることや、日記『断腸亭日乗』や随筆などのせいであろう。そして小説作品においても、荷風と経歴や価値観が重なっているように読める登場人物が頻繁に登場する。これらの条件は、小説読解を荷風の思想とでも言うべきものの解明へと結びつける方向に働いた。そうした読解は十分な成果をあげたが、一方で作家論的な文脈への回収を急ぐあまり、作品の細部への目配りが不十分な憾みがあった。本論文はそうした細部にこだわり、注釈的な手続きで作品の成立や読解を試みたものである。

第一章「習作における広津柳浪からの影響」では習作期の作品を検討した。永井荷風は悲惨小説で有名だった広津柳浪の弟子として出発した。この時期の作品『花ちる夜』(明治 33)は、柳浪の『河内屋』(明治 29)との類似が指摘されてきた。しかし詳細な比較・分析はなされていなかったため、作品の筋立て、作品の舞台、作中の空間構造、登場人物の関係という観点から検討を行った。また、同じく習作期の作品である『おぼろ夜』(明治 33)『小夜千鳥』(明治 33)について、『河内屋』を摂取した可能性を指摘した。

第二章『『野心』論』ではゾラに傾倒していた時期の作品『野心』(明治 35 年)を扱った。『野心』の主人公箕島は意志の強さを強調するが、これは立身出世を達成するためには事業を遂行する強い意志が必要であるという言説の存在が背景にあった。『西国立志編』を始めとする立身出世言説には、「剛毅」という意志の強さをもって事業を成功に導くという物語が氾濫していたのである。またエミール・ゾラ『ボヌール・デ・ダム百貨店』からの影響を検討した。箕島と『ボヌール・デ・ダム百貨店』の主人公ムーレを比較し、箕島はムーレに見られない意志の振幅があり、それは同時代言説を箕島が内面化した結果であると指摘した。すなわち箕島は始めから意志が強かったわけではなく、立身出世を鼓吹する時代によって形象された人物であった。また、先行研究では箕島の野心ばかりが強調されていたが、他の登場人物の中にも野心を持っているという描写があり、その内実を分析した。『野心』の結末は箕島の新事業のデパートが箕島の家の手代であった佐吉によって放火されてしまうというものであり、先行研究ではこれを悲劇的な破局とみなしていた。しかし必ずしもそうとは言えず、読者の解釈に委ねられている終わり方であることを指摘した。

第三章『『歓楽』論』では初出誌も単行本も発売禁止にされてしまった『歓楽』(明治 42)

を論じた。当時の文学の検閲をめぐる状況に触れながら、『歓楽』の第二の主題である恋愛を扱った文学が、当時の教育者や保守層に青年男女を墮落させるものとして危険視されていたことを指摘した。恋愛は自由結婚につながることで個人主義的傾向を助長し、また性的な興味を惹起するものと見なされていた。『歓楽』は芸術家を国家が刈り尽くせない「悪草」「毒草」と害をなすものとして表象していたが、恋愛というテーマも同様に社会に害をなすと考えられていたのである。その意味で、『歓楽』は国家に対して芸術だけでなく恋愛という要素を導入することで、二つの意味で抵抗を示していると解釈した。次に、作品を分析し、五感への刺激に関する表現の構造を検討した。五感への刺激を重ねることで、登場人物の心情などを間接的に表現するものであった。また「実感」が同時代のキーワードであり、主人公の恋愛も精神的なものを重視するプラトニックなものではなく、肉体的な刺激を追い求めるものであることを指摘した。次に荷風の象徴主義理解を検討した。荷風の象徴主義理解は、「文学上の個人主義」と見なすものであり、これはレミ・ド・グールモン『仮面の書』序文から影響を受けていることを指摘した。また荷風の象徴主義理解は「感じ」を主とするものであり、『歓楽』の表現構造にも生かされていると考えられる。荷風は「感じ」に着目することで、直接的に言い表しにくい微妙な心情を表現しようとしたのであった。

第四章では『風邪ごゝち』（明治 45）を検討した。『風邪ごゝち』は新橋の芸者屋を舞台としており、冒頭で為永春水『春色梅暦』が引用される。『風邪ごゝち』の主人公は芸者の女に衣食住を世話になっているのだが、このモチーフは『春色梅暦』を想起させる。『春色梅暦』の主人公丹次郎は、芸者の米八の世話になっている。そこで両者を比較検討した。『風邪ごゝち』の舞台となっている芸者屋は、銀座の裏通りに位置し、主人公の落魄を象徴している。次に『風邪ごゝち』ヒロインの肺病という設定については、シュニツラーの森鷗外訳『みれん』からの影響を指摘した。また作品の空間構造において、主人公のいる芸者屋の〈二階〉が〈外〉と差異化される仕組みになっていることを指摘した。差異化することで、主人公の落魄と孤独を強調する効果を持っているのである。また主人公とヒロインの人物造型を検討した。ヒロインは『絵本太功記』の武知十次郎に見立てられており、死を覚悟して出陣するような勇ましさが付与されている。それに対し、主人公は生活と戦う力を失った無力な存在であり、対比的に描かれている。対比的ではあるが、そうした異質さを乗り越えたところに二人の愛情が成立していると解釈し、そこに荷風の「調和」への志向を読み取る解釈を示した。

第五章「『かたおもひ』論」では『かたおもひ』（昭和 6）の登場人物のモデルを検討した。この小説は、芝居の帰りに芸者と自動車に相乗りになったことを契機として始まるのだが、同じようなエピソードが『断腸亭日乗』に存在する。そこで、ヒロインのモデルを素材となった記事に出てくる新橋芸者の山勇だと推定し、『都新聞』の記事を調査し、所属する芸者屋や人物像を浮かび上がらせた。その結果、山勇は歌舞伎役者の六代目市川寿美蔵（後の市川寿海）を大層慕っていたことが、当時の新聞記事からも看取された。寿美蔵は二代目市川左団次を介して荷風とも面識がある役者であった。荷風は自分も含め、山勇と寿美蔵を

モデルにして創作を行ったと考えられる。モデルを特定した上で、荷風が創作にあたってどのような仮構を施したかを検討した。一つ目の変更点は、山勇を新橋から柳橋の芸者に変更したことである。当時、柳橋は新橋よりも江戸的な古風さを保持している花柳界と見做されていた。次に、寿美蔵をモデルにした一中節の師匠である。一中節はマイナーな方であり、荷風作品のなかでは隠居や年寄りがたしなむものであった。このように、荷風は創作にあたって、物語の設定を現代的な流行から隔離する姿勢を取った。その意図として、江戸情緒の回復を目指したのではないかと推測した。

以上、荷風の作品について同時代言説や先行する文学作品との比較、モデルなどの観点から検討を加えた。荷風の作品は同時代へのまなざし、フランス文学、江戸文学、漢文学などの該博な教養に支えられており、そうした多方面からの注釈的な検討が有効であり、またこれからも必要であると考えられる。